DOI：10.2490/jjrmc.62.960

新任教授
インタビュー

Jpn J Rehabil Med 2025；62：960

札幌医科大学医学部リハビリテーション医学講座
梅本安則先生

札幌での新生活と着任3カ月後の手応え

「札幌で暮らすのも，冬を経験するのも初めてですが，この地で医学教育と地域医療に貢献できることを光栄に思っています．現在，教員は2人と小さい講座ですが，リハビリテーション部では常勤の理学療法士が18人，作業療法士が6人，言語聴覚士が3人，合計で27人所属しています．私が着任して，他の診療科との連携を緊密にとり，『リハビリテーション科は役に立つ存在だ』と感じてもらえるように努力しています．

教授選に立候補したのは，自分自身が今後，『教授職を目指すのか』または『アカデミアを離れて民間の病院などで診療に専念するのか』――そんな岐路に立っていたとき，札幌医科大学リハビリテーション医学講座教授の公募があり，私の上司にあたる横浜市立大学医学部リハビリテーション科学教授の中村健先生に相談したところ，背中を押していただいたので“挑戦”を決めました．」

再生医療ほか，幅広い治療法で頼られる存在になることが目標

「再生医療だけでなく，運動療法や物理刺激治療など，リハビリテーション治療の幅の広さや選択肢の多さを，他の診療科にアピールして，いざというときに頼りになり，心強い助っ人のような存在になれるように努めたいと思います．一方で札幌医科大学は再生医療の分野で全国的に有名で，実績もあります．私がかつて和歌山県立医科大学にいた頃から，札幌医科大学で再生医療を受けた患者さんが，地元に戻ってリハビリテーション治療に頑張る姿を見て，再生医療の可能性に惹かれました．これまでは残存機能を活かすのが目的であったリハビリテーション治療でしたが，再生医療の進展はその前提を変えつつあります．私の代でも，再生医療を柱の1つに据えたいと考えています．」

都市と自然が共存する札幌の魅力

「住まいは札幌の中心地近くで，クルマの要らない環境を選びました．冬も今から楽しみです．都市機能と自然が共存する街で，梅雨のない快適な夏や大通公園での催しなど，生活環境にも大きな期待を寄せています．」

リハビリテーション医学との出会いと転機

「私がリハビリテーション医学に関心を持ったのは，初期臨床研修で田島文博先生の指導を受け，内科以上に広い視野で地域を支える診療科だと感じたことがきっかけです．リハビリテーション科を専攻して5年を過ぎた頃から『人間は動物であり，動くことによって臓器や機能が最適化される』という根本原理を実感し，運動や物理刺激による全身管理の重要性を深く理解するようになりました．この学びを若手医師にも伝え，全身を診ることができるリハビリテーション科医を育てたいと考えています．」

梅本安則（うめもと・やすのり）教授

2025年4月より札幌医科大学医学部リハビリテーション医学講座教授に就任．脳卒中や脊髄損傷などによる機能・能力障害の診断と治療を専門とし，運動や温熱刺激が人体に与える影響，マイオカインの役割など運動療法・運動生理学の研究に注力．和歌山県立医科大学，関西電力病院，米国Rutgers大学，横浜市立大学などでの研究・診療経験を経て，超急性期からのリハビリテーション治療・身体機能の強化，社会復帰を支えるリハビリテーション医療を推進．

北海道から全国に広がる人材育成モデル

「どんな時でも幅広く対応できるジェネラルなリハビリテーション科医を育成することが私の理想です．北海道は人口密度が低く，札幌市以外では過疎化が進んでいます．全国の課題が先行して現れる地域なので，優れた医師を育てることができれば，そのモデルを全国に広げられるはずです．これを目標に，北海道大学の向野先生，旭川医科大学の大田先生と一緒に話し合いながら，北海道ならではの人材教育について構想を進めています．」

流動性を恐れず，魅力あるキャリア環境を整備

「個人的には，疾患別・臓器別の専門性に加え，他科と対等に議論できる総合力をもってほしいと考えています．そのために救急での全身管理や他科での研修など，刺激的な経験を重ねられるようにサポートしていきたいです．また今の時代は転職も当たり前なので，他科に移ることも，逆に来てもらうことも自然な流れだと考えています．流動性を恐れず，リハビリテーション科医の魅力を感じてもらえる環境を整えていきます．」

（文責　広報委員会）